

【氏名】川村 潮

【所属大学院】（助成決定時）早稲田大学文学研究科史学（東洋史）

【研究題目】

神託と予言—中国古代社会における占いの意義

【研究の目的】

「占い」というと、何か非科学的で、学問的研究の対象としてはふさわしくないように見える。だが、占いは人類が常に希求し続けてきたものであり、これを歴史的に研究するということは、過去のひとびとの痛みや願望に立ち返り、その心性を明らかにすることにつながる。

そこで、中国古代において、最も権威的であった「易」という占いに着目し、そのテキストの一つである『帰蔵』の研究を行った。その結果、『帰蔵』の信憑性が、もともとの神話・伝承的なものから、徐々に儒教経学的なものへと転化していったことを明らかにした。同時に、この変遷が他のテキスト、とくに『周易』の成立過程とも関わってくるのではないか、という見通しも得られた。

そこで本研究では、『帰蔵』をはじめとする占書の変遷過程、あわせてそれらを利用した人々について検討することで、『周易』の経典化の過程を明らかにし、そこから中国古代における占いの意味にせまっていくこととしたい。

【研究の内容・方法】

本研究は、以下の四点に沿って行われる。

一、『周易』経典化の過程

『周易』とともに「三易」の一つとされる『帰蔵』の書誌学的検討を通じて、『周易』の成立と経典化について考察する。特に、(1)『帰蔵』経典化の歴史的要因、(2)『帰蔵』と『周易』の成立の関係、(3)『周易』諸テキストの比較と検討などに焦点をあてる。

二、文献史料にみる占いの記録

当時の社会において、占いがどのように機能していたかについて、文献史料を中心に検討する。『史記』『漢書』『後漢書』などには、占いの事例やそれらに関連する記述が散見する（『史記』亀策・日者列伝、『漢書』五行志、『後漢書』方術伝など）。これらの記述から、(1)占者の社会的地位、(2)占いの目的とその結果、(3)当該史料における占いに対する評価といった点について考察する。

三、出土文字資料における占いの記録

占いに関する出土文字資料としては、甲骨文・ト筮祭禱簡が著名である。ここでは、『帰蔵』・『周易』の出土例とも比較的近い時代のもので、出土例も増大しているト筮祭禱簡について検討する。これらの史料は、正史等の編纂史料ではなく、当時の占いについて記した一次史料であり、占いを低俗なものとする偏向から自由な視点で記されたものである。それゆえ、当時における占いの実相について検討することができる。ここでは、(1) 占者（集団）の地位、(2) 占いの手法と原理の二点に着目する。

四、占法の関連性とその伝承

上記の検討は「易」を中心とするものであるが、ここではそれを踏まえ、中国古代の様々な占法の関連性とそれらの伝承の問題について検討する。ここでは日本の陰陽道関連文献に多く残されている中国古代の占法を対象とする。

【結論・考察】

本研究によって得られた知見は、以下の通りである。

一、『周易』経典化の過程

『帰蔵』の経典化には、当時の学問的状況が大きく関わっており、その状況は『周易』の成立過程とも関係してくることが明らかとなった。また、『帰蔵』は『周易』をもとに成立した二次的な占書である。

二、文献史料にみる占いの記録

当時の社会において、占いは様々な目的・場において行われていた。それを専門的に担っていた人々も様々な階層に属していたが、とくに、儒教で重視された「易」を用いた人々はその異能ゆえに官吏となることが多かった。

三、出土文字資料における占いの記録

楚の貞人たちは、おそらく血縁を紐帯とする集団を構成しており、王族らを中心とする人々と契約的関係を結んでいた。そこで用いられた技能は主に世襲されたが、占具などは貞人集団間で貸与することもあったようである。

四、占法の関連性とその伝承

若杉家文書をはじめ、日本の陰陽道文献には中国古代の占法が伝わったものが見える。盛んに摂取された中国由来の通俗的占書（通書）が日本に豊富に残存していることからすると、これらに対する信仰が大きく関わっていたことが覗える。